（ 続紙 １ ）

京都大学	博士（　人間・環境学　）	氏名	三笠　雅也
論文題目	境界性パーソナリティ障害における「間身体性」 －メルロ＝ポンティ思想の視座から精神科臨床を診る－		

（論文内容の要旨）

本論文では、境界性パーソナリティ障害（以下BPD）の「身体性」に着目し、フランス現象学派の哲学者であるMerleau-Pontyの＜身体論＞を援用し、BPDの精神病理を探求することを主題として議論した。彼の＜身体論＞の視座から診ることによって、臨床家が向き合ったときのBPD患者の独特な雰囲気は、BPD固有の「身体性」に由来するものであることを示した。後半では、Merleau-Ponty思想の精神医学への拡張可能性を示した。

第Ｉ編の第1章では、BPDへの導入として、神経症と精神病の概念史から境界例までを概観した。第2章では、パーソナリティ障害の概念史とBPDの歴史的背景を紹介した。

第3章では、Merleau-Pontyの＜身体論＞を主に説明した。ここで本論文での主要な概念となる「身体的実存」や「間身体性」などの用語を確認した。Merleau-Pontyの捉える身体は、機械論的・生理学的な身体としての「客観的身体」と、その奥底にある「生きられる身体」としての「現象的身体」の2種類が想定されていた。「身体的実存」は、主体としての世界のなかでの在り方であり、かつ身体としての世界内存在を表す用語、「間身体性」は、成人後は潜在化しているものの、幼児期の自他未分化な身体経験が、他者知覚や感情経験によって作動するものであり、いわゆる「前人称的な水準の間主観性」に相当する「身体性」の概念であった。さらにMerleau-Ponty思想を、晩年の＜存在論＞を含めて簡略に説明した。

第4章では、BPD患者が多用する「投影性同一視」という心理学的概念の構造を論じた。BPD患者は、可逆的なパースペクティヴをもてないため、他者を生きることができず、強烈で執拗な投影によって他者の身体を乗っ取る必要があると思われた。また、この投影を受けた治療者は、自己の情緒と認識し行動化してしまうことがあることを指摘し、BPD患者だけでなく治療者のこのような「身体性」が、心理学的には「投影性同一視」とされていることが示唆された。

第5章では、解離性障害の精神病理の一端を刑務所での精神科臨床から論じた。一般社会での解離性障害の患者はBPD患者のような固有の「身体性」がみられない一方で、刑務所において起こる解離による「身体性」は明らかであるため、受刑者の「身体性」に着目して議論した。一般社会で精神科受診歴のない男性受刑者は、防衛機制である解離を使いやすく、その表現型として原始反応が多くみられた。それは刑務所という「場」によって、受刑者は「間身体性」の水準での機能低下が起こるためであり、受刑者は解離性同一性障害のような複雑な解離にはならず、その逆に一般社会では、解離性障害の

患者は「間身体性」の水準での障害はないと推察した。

第6章では、BPDの精神病理とBPDにおける小精神病の精神病理を議論した。BPDの精神病理は「間身体性」の水準での障害であり、他者知覚や自己感覚に鈍感になってしまうと推察し、これがBPD患者の「身体的実存」であると指摘した。BPD患者が他者関係で喪失体験やその恐れがあると小精神病に陥りやすく、そこにはBPD患者固有の「身体的実存」が影響していると述べた。小精神病は一見すると解離状態と似ているが、根源的な病理が異なり、鑑別症状として被害念慮（関係念慮）を挙げた。この症状はBPDの「身体的実存」から表出するものであり、鑑別として臨床的有用性があると述べた。

第7章と第8章では、操作的診断基準であるDSM-5（2013年）やICD-11（2018年）にみられる、BPDを含めたパーソナリティ障害（以下PD） 概念の最近の動向について言及し、今後も実証的研究やメタ解析の成果によって、この概念には大きな変化があると予想した。

第Ⅱ編の第1章では、Merleau-Ponty思想の視座から「愛着」の構造を明らかにし、「愛着の問題」群の精神病理を論じた。「愛着」とは生物個体が危機的な状況のなかで特定の他者に「くっつく」ことによって安全を確保することであると確認し、BPDに限局せず、他の精神障害（「愛着の問題」を抱える人たち）への開在性を示した。

第2章では、精神医学に生態学的アプローチが適しているのではないかと提案した。Merleau-Pontyに直接的もしくは間接的に影響を受けているドイツの精神病理学者Fuchsの「脳の生態学的考え方」を概略し、彼の考え方を援用することで心身問題や心脳問題に対して身体と環境を付加することで新たな視界を述べた。この章では、理論的観点からの精神医学への拡張可能性を示した。

第3章では、精神科臨床の基盤である「対話」について論じた。「間身体性」の次元でのコミュニケーションの重要性を示唆し、申請者の造語である「間身体的対話」という概念を提唱した。この章では「間身体的対話」からの治療論（特に精神療法）への開在性を示し、Merleau-Ponty思想の精神科臨床への拡張可能性を示し、第Ⅱ編の終わりとした。

本論文は、Merleau-Ponty思想を精神科臨床へ十全に援用できたわけではないが、今後のMerleau-Ponty研究と精神科臨床の架け橋への端緒と位置づけられた。

（続紙　２　）

（論文審査の結果の要旨）

境界性パーソナリティ障害（以下BPD）の患者は、精神病と神経症の間の「境界」の人たちであり、社会生活における不適応がみられる。精神科臨床の場で彼女／彼と向き合うとき、臨床家は治療構造といった限界設定や「治療者－患者」関係の中で生じる転移・逆転移などに注意を払わざるをえない。そのため、BPDの患者とのかかわりを避けてしまう現状があり、BPDの精神病理に対する認識不足が示唆される。

本論文は、フランス現象学派の哲学者であるMerleau-Pontyの＜身体論＞を援用しながら、臨床家が診察で向き合ったときのBPD患者の独特な雰囲気は、BPD固有の「身体性」に由来するものであることを示した。さらに、Merleau-Ponty思想の精神医学への拡張可能性を考察した論考であった。

申請者は第Ｉ編の第1章と第2章において、18世紀に神経症の概念が生まれ、19世紀に精神病の概念が分化し、20世紀中頃に「境界例」が提唱されたなどBPDに至るまでの概念史を説明した。これらは内外の主要な研究を網羅しており、総説として高く評価できる。第1章の成果は臨床精神医学 2019年発行 第48巻 第7号 801-805頁に掲載された。

第3章ではMerleau-Pontyの＜身体論＞を説明した。「身体的実存」は身体としての世界内存在を表し、「間身体性」は、成人後は潜在化しているものの、幼児期の自他未分化な身体経験が他者知覚や感情経験によって作動するものであると説明した。また、Merleau-Ponty思想を晩年の＜存在論＞を含めて概観した。本章は重要な概念を的確に説明しており、Merleau-Ponty研究の総説として高く評価できるものである。

第4章においては、BPD患者が多用する「投影性同一視」という心理学的概念の構造を論じ、BPD患者だけでなく治療者の「身体性」が心理学的な「投影性同一視」に相当すると指摘した。以上の成果は、メルロ＝ポンティ研究 2020年発行 第23巻 23-41頁に掲載されている。その際に必ずしも対象関係論の一次文献が十分に精査されているわけではないが、現象学の概念を用いてBPD患者の精神病理を記述しようとする本論の趣旨にとってこの点は大きな問題ではないと判断した。

また、第5章において、解離性障害の精神病理の一端を刑務所での精神科臨床から論じた。一般社会での解離性障害の患者はBPD患者のような明らかな「身体性」がみられないが、刑務所において起こる解離の「身体性」は明らかであるため、受刑者の「身体性」に着目して議論しており、今後の展開を期待させる論考と評価できる。

第6章では、BPDの精神病理とBPDにおける小精神病の精神病理を議論した。BPDの精神病理は「間身体性」の水準での障害であり、他者知覚と自己知覚に鈍感になってしまうため、あらゆる他者に対して能動的に敏感にならざるをえないと指摘した。また、BPD患者は小精神病に陥りやすく、一見すると解離状態と似ているが、根源的な病理が異なっており、鑑別するための症状として被害念慮（関係念慮）を挙げた。以上の成果は、臨床精神病理 2021年発行 42巻 2号 107-121頁に記載された。

第7章と第8章では、操作的診断基準であるDSM-5（2013年）やICD-11（2018年）

にみられるBPDを含めたパーソナリティ障害（以下PD）概念の最近の動向を示し、今後もこの概念には大きな変化があると予想した。主要な研究を網羅しながら学術的現況を的確にまとめており、総説として高く評価できる。

第Ⅱ編の第1章では、Merleau-Ponty思想の視座から「愛着」の構造を明らかにし、「愛着の問題」群の精神病理を論じた。BPD以外の精神障害（「愛着の問題」を抱える人たち）への開在性を示した点で、疾病論への拡張可能性を評価できる。

第2章では、精神医学に生態学的アプローチが適しているのではないかと提案した。Merleau-Pontyに直接的もしくは間接的に影響を受けているFuchsの「脳の生態学的考え方」を援用すると新たな視界が開けると説明した。以上の成果は、新進研究者Research Notes 2018年発行 第1巻 17-25頁に掲載された。

第3章においては、精神科臨床の基盤である「対話」について論じた。「間身体性」の次元でのコミュニケーションの重要性を示唆し、申請者の造語である「間身体的対話」という概念を提唱した。本章では、Merleau-Ponty思想の治療論（特に精神療法）への拡張可能性を示しており、今後の展開を期待させるものと評価できる。

BPD を Merleau-Ponty の＜身体性＞から考察する研究は、新奇性や独自性をもつ精神病理学的研究である。申請者は Merleau-Ponty 思想の精神科臨床への援用の不十分さを述べた。確かに第Ⅱ編にはアイデアに留まる箇所があるが、Merleau-Ponty思想と精神病理学の融合という点において学術的意義の高いものと考えられ、人間・環境学研究科 認知・行動科学講座 身体機能論分野の研究として高く評価できる。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和4年1月8日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日：　令和　　年　　月　　日以降